思文閣出版
1,900円＋税

ハンサムに生きる 新島襄を語る(七)

本井康博(大学神学部教授)著

本井康博教授の「新島襄を語る」シリーズ(七)は、これまでのシリーズの中で、初めて新島本人だけでなく、お連れ合いの八重夫人にも焦点を当てた書物となった(表紙のカバーも一味違う)。折しも、八重が「NHKの歴史秘話ヒストリア　明治悪妻伝説　初代〝ハンサム・ウーマン〟」として「全国デビューした」1年後の上梓でもあったので、同志社の内外で一躍「ハンサム・ウーマン」「ハンサム・レディー」という言葉が流行語となった。

果たして、八重は新島にとって「悪妻」であったのか？実際の夫婦像は？「ハンサムに生きる」とは？等々を、著者は新島および八重の遺した言葉はいうに及ばず、周りの評判も引き合いに出して読者の判断材料に提供する。結婚前の出会いのエピソード、大磯で最期を迎えるときの八重夫人の役割、さらに新島没後の八重の生き方も詳しく紹介される。「新島襄の女子教育観」という正統的な章もあれば、「新島襄をめぐる女たち」と思わせ振りな章もある。また、「会津の女」として、「男勝り」「強情」な八重を持て余し気味の新島像も描かれる。

「終わりに」で「新島八重の特集号ぽく」なったと述べられている如く、八重にまつわる記事が本書の多くを占めている。しかし、本シリーズの主目的「新島襄を多角的に紹介する」は、私人・家庭人としての新島像をいちばん身近な存在、八重夫人を通して描くことにより、十分に果たされたと言える。

なお、新島の家庭を生活面から知りたいと思われる読者には、そのための章もいくつか用意されている。

坂本清音(女子大学名誉教授)

ミネルヴァ書房
3,000円＋税

よくわかる考古学

松藤和人(大学文学部教授)、門田誠一編著

高度経済成長期・バブル経済期を経て、全国各地で開発に伴う遺跡調査が進行し、消えゆく遺跡の代償として、膨大な考古資料が蓄積された。これらの考古資料を歴史的に位置づけることが研究者の責務であり、埋蔵文化財を取り巻く環境が危機的状況にある今こそ、考古学をわかりやすく、地域の歴史を解明する魅力ある学問として広く社会に伝える地道な作業が求められている。

こうした課題に真摯に向き合う待望の書が刊行された。本書は、旧石器考古学の国際的な学者であり学界を牽引する松藤和人氏と、東アジア考古学の第一人者で日韓交流史に精通する門田誠一氏が編者となり、各専門分野の研究の最前線に立つ、大学や行政機関に所属する多くの研究者が総力をあげて取り組んだ考古学の入門書である。

大学のいわゆる一般教養科目「考古学」の補助教材として用いることができるよう、最新の研究成果のもとに時代を追って構成されたものであるが、大学に学ぶ考古学入門者にのみ向けられたものではない。地域社会に果たすべき考古学の社会的役割や遺跡保存と活用の問題をもテーマとし、考古学に関心を寄せる市民に向けても広く発信されたものである。列島内の考古資料を東アジアの歴史的潮流のなかで理解し評価しようとする姿勢が全体に貫かれている。

日進月歩する考古学の今をわかりやすく伝えると共に、考古学的にみた日本文化の特性を、グローバルな視点で様々な角度から描き出し、新たな歴史認識を提起する一級の研究書でもある。

高野陽子(京都府埋蔵文化財調査研究センター)

法律文化社
2,800円＋税

新しい福祉サービスの展開と人材育成

埋橋孝文（大学社会学部教授）、同志社大学社会福祉教育・研究支援センター著

本書は、文科省大学院GPに採択された「国際的『理論・実践循環型』教育システム」の研究成果をまとめたものである。「理論の実践化と実践の理論化」を目指して、同志社大学社会福祉教育・研究支援センターで実施された研究プロジェクトの成果と同志社大学社会福祉学科独自の実習教育に関する論稿が収められた労作である。

その内容は、第Ⅰ部「新しい福祉サービスの展開」、第Ⅱ部「明日の福祉を担うヒューマンパワーの育成」、第Ⅲ部「福祉サービスとヒューマンパワーに関する国際比較―日韓比較と中国」の3部（全11章）から成っている。

2009年4月より社会福祉士養成の新カリキュラムがスタートし、社会福祉養成施設の一つである福祉系大学においても社会福祉専門教育のあり方が模索されている。ともすれば資格取得のための近視眼的な教育に偏重しがちな中で、福祉サービスの今日的展開をふまえて福祉分野・専門職に求められる役割を考察し、高等教育機関として大学が担うべき役割を具体的に提示する本書は学ぶべきところが多く、諸外国との比較研究からもわが国における福祉サービスや人材育成はどうあるべきかを再考する機会を与えてくれる良書である。社会福祉専門教育に携わる方々には是非精読をお薦めしたい。

新島襄先生の「人一人は大切なり」の精神のもと、幅広い視野から福祉サービスの人材育成が実証的に追究されており、同志社社会福祉の教育理念も感じとれる一冊である。

成清敦子（関西福祉科学大学社会福祉学部講師）

中央経済社
3,800円＋税

GMの経験
―日本への教訓

石田光男（大学社会学部教授）、篠原健一編著

アメリカ自動車工場では、1980年代以降、競争力の改善を目的に、大きな作業組織の革新が展開されてきた。石田教授らによれば、本書とそのGM調査が抱いた問題意識は、このアメリカ自動車工場の改革をごまかしなく「わかりたい」という、簡明で直截な事実への関心であったという。重要なことは、こうした率直かつ端的な表現には、経営と労働分野での昨今の実証研究のあり方に対する、深刻な疑念が込められているということである。そして、それはそのまま、職場改革をさしたる吟味も無く「チームコンセプト」という言葉で代表させて、最良慣行の採用拡大を指南してきた、流行の教説への痛烈な批判ともなっている。

その簡明な問題設定に回答を与えるため、本書は従来からの労使関係論の方法的伝統に対して、画期的な革新を遂行している。大胆に摘要して言えば、「経営という労働」を「誘因という『符号』」（報酬の規則）と「統制という『符号』」（仕事の規則）を通して記述すること、これがその新たな方法の核心ということになろう。開拓的な方法にもとづく、GM工場改革の分析と記述は、読者を魅了するほどのリアリティに富んでいる。(a)工場の方針管理（組織業績管理）を実行する「現場管理組織の機能不全」（職長層の脆弱な技能）、(b)それを補足するものとしてのチーム作業組織、(c)こうした方針管理の仕組みをワークさせるための「労使協力体制」の「人為的な構築」、これらが「チームコンセプト」という表現で丸呑みにされてきたGM工場改革の実像であり、その苦悩の内実に他ならない。何度も立ち返って熟読したい、第一級の研究書であると思う。

上田眞士（大学社会学部教授）

ミネルヴァ書房
2,800円＋税

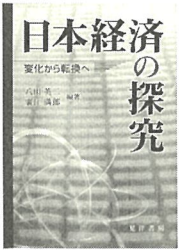
イギリス現代政治史

力久昌幸（大学法学部教授）、梅川正美、阪野智一編著

大学法学部の梅津実教授および力久昌幸教授が編著者の1人として執筆・編集された『イギリス現代政治史』は、イギリスの戦後政治史を一つの通史として纏めた好著である。同書は、「イギリス政治研究会」として10年以上続けられている研究会活動の成果でもある。本書は、最新の研究成果に基づきつつも大学生や一般読者にも読みやすいように配慮されている。

本書は、第二次世界大戦終戦直後のアトリー労働政権から始まりブレアおよびブラウン労働政権まで、戦後の各政権を一つの時代区分として纏めた章立てを行い、その時代の内外の課題やそれに対する各首相のリーダーシップに注目しつつ、詳細な解説を行っている。また、各政権の主要政策の展開とそれに対する社会の反応に注目し、その政権の位置付けを行っている。各章の担当者は、いずれもイギリス政治史研究の第一線で活躍している研究者であり、イギリス政治の単なる解説ではなく、新たな解釈による意味づけ等も意欲的に行われている。通史としてのイギリス戦後政治史と戦後の個々の政権の分析という両方の側面からイギリスの戦後政治を改めて見直すための指針となる書と言えよう。なお、巻末資料として戦後の総選挙の結果やイギリス現代政治史年表が付けられており、各章内にある「コラム」とも合わせて、イギリス戦後政治史を読み解くための好適書である。

鷲江義勝（大学法学部教授）



晃洋書房
2,800円＋税

日本経済の探究
―変化から転換へ―

八田英二（大学経済学部教授）、廣江満郎編著

本書は日本経済の入門書であると同時に、経済学の入門書として書かれた。そこから全体の構成と各章の説明の、ひいては本書全体の特徴が生まれたように見える。

第一に、本書は全9章によって日本経済を展望する。すなわち、日本経済の生産、分配、支出の側面などを扱った章にはじまり、ついで、家計、企業の経済行動と産業構造を分析した章がつづく、さらには、国内経済の主要課題である金融、財政、公的年金の検討へと移り、最後に、日本の対外経済関係と公共政策を考察して、日本経済全体を解説する構成になっている。第二に、経済学の入門書としての特徴は、各章の説明にあらわれる。一例をあげると、金融を扱った第5章では、はじめに金融についての基本的な用語や概念が説明される。そして、日本の金融の推移にそくして、資金運用形態の変化、金融市場の拡大、金融の自由化、グローバル化が解説され、金融の動向とともに（金融）経済学を学べるように工夫されているのである。こうしたことは他の章にも共通し、第2章では消費構造の分析を効用の説明からはじめるといった具合である。

こうした特徴をもつ本書は、日本経済の『変貌』に始まり、いままた、この『探究』に結実した、執筆者たちの過去20年におよぶ研究の成果である。そして、その手堅い計量分析などに触れると、同じ対象を持続的に検討しつづける姿勢にのみ発展がある、との思いを禁じ得ない。いっそうの発展を期待したい。

近江健吉（大学経済学部嘱託講師）

晃洋書房
2,700円＋税

金融システム改革と現代経済

大学人文科学研究所編

本書は、人文科学研究所第16期研究会「市場型間接金融とマクロ経済」（代表者・植田宏文大学商学部教授）の研究成果をまとめたもので、執筆陣は、植田教授の他、藤原秀夫教授をはじめ、丸茂俊彦教授、五百旗頭真吾准教授など、本学の金融研究を代表する顔ぶれを揃えている。資産の証券化による市場型間接金融の拡大に代表される金融システムの変革が、どのような経路を通じて実体経済に影響を与え経済成長に貢献するのか、またその際の問題点は何かについて、多角的な視点から分析を行っている。市場型間接金融の問題を摘出するために直接金融・間接金融の概念を学説史に遡って検討することから始まり、直接金融化が進んだ近年では金融政策のトランスミッション・メカニズムとして銀行の貸出行動を重視するクレジット・ビューが成立するようになったことの実証、資産担保証券市場における情報開示の重要性、行動経済学の知見にもとづく銀行行動の非合理性の検証、さらには年金不信の背景にある問題、ローン債権の証券化がグローバル・インバランス拡大にもたらした影響、インドネシアにおける中央銀行の独立性の変遷といった広範な論点が俎上に載せられている。金融分野の研究者ばかりでなく、金融実務にかかわるビジネスマン、金融の仕事に興味のある学生諸君にも広くお薦めできる好著である。

田淵太一（大学商学部教授）

ミネルヴァ書房
4,000円＋税

貨幣と賃労働の再定義

―異端派マルクス経済学の系譜

向井公敏（大学商学部教授）著

本書は、『経済学批判要綱』を中心に長年マルクス研究に従事してきた著者の論考をまとめたものであり、二部から構成され、一部ではマルクスの価値論（抽象的人間労働論・価値形態論）、二部では賃労働関係論が論じられる。サブタイトルに「異端派マルクス経済学の系譜」とあるように、ルービンやネグリを手掛かりに、従来のマルクス経済学の通説を批判的に検討し、新たなマルクス像を打ち立てることが意図される。本書の著述のスタイルは、先行解釈を批判的に検討しながら、マルクスのテキストに対して自身の解釈を施すという極めてオーソドックスな方法に貫かれている。このように述べると本書は単なる訓詁学にすぎないような印象を与えるかもしれないが、緻密な文献解釈の背後には、著者の現在の資本主義のあり方を絶えず配慮し、それを読み解くカギを手にしようとする意図をはっきりと見て取ることができる。第二部において、『資本論』の対象領域をめぐる「プラン問題」を論じる際、文献上の成立史や研究史を論及するとともに、ドゥルーズやフーコーまでを引き合いにだす著者からうかがえるのは、現代資本主義の変容をマルクスに照らして考えようとする姿勢である。本書は、昨今のブーム本と異なり読者を選ぶかもしれないが、このような本に飽き足らない人、あるいはかつてマルクスを手にした人がマルクス研究の現状を知るうえでは欠かせない一冊である。

稲井　誠（大学商学部講師）

昭和堂
2,000円＋税

日本中世都市遺跡の見方・歩き方
―「市」と「館」を手がかりに

鋤柄俊夫（天学文化情報学部教授）著

中世日本における流通経済の発展とその重要性は、中世都市遺跡の列島各地での相次ぐ発見により徐々に明らかにされつつある。鋤柄俊夫教授は長年に渉る考古学の現場での経験をもとに、都市遺跡相互の関係から歴史を明らかにしていくことをテーマに研究を進めてきた。

その方法論として本著を貫くのは、地域を俯瞰し周辺遺跡との関係を見るマクロ的な視点と遺物等の詳細な研究から人間にアプローチするミクロ的な視点の双方が重要であるとする考え方である。

歴史的景観復原―この方法論により、地相的要素から清和源氏の本拠地である南河内に、常総台地の平国香の館がその原像として姿を現して来る。一方で、周辺の河内鋳物師の遺跡や館の発掘成果から、生産と流通を特色とする南河内の中世都市のあり方が分析可能となるのである。

本著のキーワードとなっている中世都市における流通拠点としての「市」的なあり方と宗教・政治的拠点としての「館」的なあり方は、アプローチが異なっていても、一遍聖絵の信濃国の館や平清盛が造営した福原などでも見事に明らかにされている。

一読すれば、読者はまさにそこに石井進氏らが表現した権利関係の重層化等を特色とした中世社会の大きな転換点を読み取ることができるであろう。また、著者の述べる歴史的景観復原の真髄がこの中世の変化を明らかにすることであることも、また同時に理解され得るのである。

諸頭伸行（天学文化情報学研究科博士課程前期課程）

成山堂書店
2,400円＋税

観光立国へのアプローチ

山上 徹（女子大学現代社会学部特任教授）著

長年、観光を研究されてきた筆者が、新しい視点を加えて日本を観光立国へ導くための方策を提示したのが本書である。

前半では、まず、観光資源の基礎、国際観光の不確実性、観光立都の必要性が述べられている。さらに、近江商人の「三方よし（売り手、買い手、世間）」を発展させた「四方よし（観光産業、観光客、観光地・住民、観光立国・政府）」というユニークな視点から観光立国の可能性を論じ、「四方」の鍵となる観光行政の一元管理の課題を提起している。続けて、訪日中国人観光の促進を取り上げ、わが国の規制緩和の必要性を説く。

注目すべきなのは、筆者が日本の観光立国だけを視野に入れているわけではないことである。途上国と先進国との間でのツーウェイ・ツーリズムが、国際観光の、ひいては各国の観光立国の基盤となることが一貫して説かれている。こうした問題意識を受けて、後半は、外国の観光立国を日本のアウトバウンドと関係づけながら論じる。具体的には、中国の首都・北京と古都・西安の観光を取り上げ、「楊貴妃」という人的資源の活用の有効性や、日本人観光客に対する安心・安全の確保の重要性を指摘する。さらには、最貧国の多いアフリカ大陸の観光開発の現状と問題点を検証し、現実的に望ましい施策の方向性を示唆している。

本書は、この分野の専門家だけでなく、国の重要政策となってきた観光に関心をお持ちの方々に、広く読んでいただきたい一冊である。

堀野正人（奈良県立大学教授）

洋泉社
2,300円＋税

「食べる」思想
―人が食うもの・神が喰うもの

村瀬 学（女子大学生活科学部教授）著

「われ食べる、ゆえにわれあり」。当然とも言えるこの言葉は、普段意識の外に押しやられてしまっている、「食べる」という行為に対して問いかける。

私たちは日々何かを食べていなくては存在できない。「食べる」とは、「生き物」を食べ、消化し、吸収し、栄養を体内に取り入れることである。しかし「一口サイズ」となって目の前に現れると、それが「生き物」だったという意識は消え去っている。本書では、そんな「生き物の死」が、私たちの「生の源」になるという理不尽さを、改めて浮き彫りにする。筆者はまた「食べる」とは何か、「食べ物」とは何かという問題を、人身御供や「カニバリスム（人肉嗜食）」なども視野に入れつつ論じ、そこから「人が食べる過程」と「神が食べる過程」を想定し、そこに食べる神と食べる人が「逆さまの形」で相関する総体のあることを論じている。

著者はまた宮澤賢治の童話や、聖書、絵画、映画、近代の絵本、さらには臓器移植、BSE問題などに見えている「食べる情景」についても問うている。学校教育の中では、栄養素や消化酵素の名を学ぶ。また調理実習では、おいしく食べるための味付けや技術を学ぶ。しかしながら、「食べる」とはどういうことなのかと問われる機会は少ない。今日街中にはファストフードなどの飲食店にあふれ、いつでも「食べる」ことが可能である飽食の今、本当に考えなければならない問題をこの書は投げかけている。

前田実香（女子大学生活科学研究科修士課程）

講談社
740円＋税

「あなた」の哲学

村瀬 学（女子大学生活科学部教授）著

哲学は「わたし」や「他者」という言葉ばかり考えてきた。そんな現代の思想風土の中で、例外的に森崎和江さんは、「わたし」とも「他者」とも呼ぶことのできない存在を「あなた」と呼び、「あなた」を考えることの重要性を訴えていたと著者は言う。けれども、その「あなた」は、いわゆる「二人称のあなた」のことではない。ひとを「あなた」として感じるときは、相手を「崇高な存在」として感じているときであり、それは相手を「個人」や「個体」では完結しない「三世代存在」として見ているときなのだと著者は言う。「三世代存在」とは、一見すると「個」にしか見えないわたしたちの内部で、三つの世代を受け継ぐ構造がつねに動いていることを主張するために著者が考え出した魅力的な造語であり、最も近い概念にマルティン・ブーバーの「du（なんじ）」を挙げ、考察している。

相手を大事に思うときとは、相手を「これまで送り届けられてきた道のり」と、「これから送り届けられる道のり」の中で受けとめるときに感じるものであり、そういう姿として現れる相手を「あなた」と呼ぶのだと著者は言う。そして、そういう「あなた」は、いつも確実に感じ取れるわけではなく、関係の中で見えなくなることも出てくるという。このような「消えつつ現れる」「あなた」という存在を、文学作品や精神医療、社会的な事件の中に、この本は具体的に見出そうとしている。

谷本由美（女子大学文学研究科博士課程前期課程）

晃洋書房
2,900円＋税

サステナビリティの政策と経営―低炭素社会をめぐる日本とスウェーデン

長岡延孝（女子大学現代社会学部教授）編著

北欧といえば福祉とならんで環境の分野で先進的であると見られている。

本書は、環境問題を持続的な社会のシステムの問題ととらえ、低炭素社会を目指す取組をスウェーデンなどの北欧と日本を対照しながら紹介している。

環境問題や環境政策に関する書物は多数有るが、本書の特徴は企業と技術の問題を正面に据えていることである。どこの国も環境問題の出発点は公害問題である。公害問題は、企業の責任追及としてとらえられがちである。実際わが国では、四大公害病に代表されるように、加害企業対被害者という構図でとらえられてきた。それに対して、スウェーデンでは、個別の対応ではなくシステム全体の問題と捉えてきた点に日本との相違があると述べられている。しかし、わが国でも企業自身が積極的に環境問題へ取り組むような変化が生じており、それは企業をとりますガバナンスの変化であることが指摘されている。

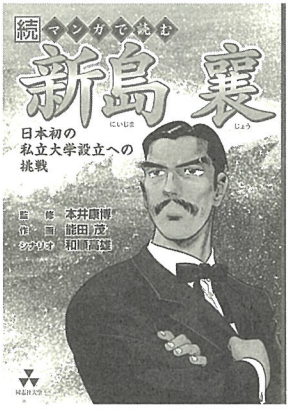
本書のもう一つの特徴は、再生可能エネルギーの中でもバイオエネルギー、とりわけ木質系バイオマスを重視している点である。一般に再生可能エネルギーというと、太陽光や風力をとりあげることが多い。しかしわが国もスウェーデンも森林が多いことを考えると、木質系バイオの活用は非常に可能性が大きいだろう。スウェーデンにおける成功事例を紹介しながら、日本への適用可能性が述べられている。

このように本書は、環境問題、環境政策にあらたな視点を導入したもので環境問題に関心を持っている方には必読の本である。

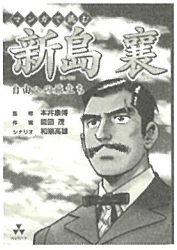
松岡憲司（龍谷大学経済学部教授）

同志社創立135周年記念●

『続マンガで読む新島襄』（完結編）出版



同志社の創立者、新島襄の後半生を描く完結編。『続マンガで読む新島襄―日本発の私立大学設立への挑戦』を2010年11月29日発行。既刊『マンガで読む　新島襄―自由への旅立ち』とともにお楽しみください。



2008年12月25日発行

株式会社同志社エンタープライズで頒布しています。

お問い合せ　TEL075-251-3027
FAX075-251-4044